

内・外両側性について

中山 浩 一

近年、イエイツ詩の評価はノーベル文学賞贈与の対称となった諸作から、その後の作品に重点が移行して来ている。これは我々が現代の最先端で生活し、我々の共鳴が詩の現代性にその根底を見出しているからであろう。今の詩と言っても、明瞭に截別し規格する事は困難で、それぞれの詩が試みている実質を現代に生存する人々が生きる拠点となし得るか否かを評価の根本的規準とする以外説明の方法がない。

ここではイエイツ詩の細部に互る検討はすぐれたイエイツ研究家の多くの業績を参照することで十分と考え、十九世紀末までの詩の枢要な特質のひとつとなっている内・外両側性を批評の中軸にイエイツの詩を考えて見るつもりである。従って詩の外郭即ち構造・統一・律動・性格とか imagery 等詩が装っている衣は (I. A. Richards の “technical part” の対称となるもの) 自然斯題から遠退き、これに関連をもつ詩的経験のみが (critical part” の対称物) 焦点となってくる。内・外側とは我々自身とそれを取巻く自然界を指し、詩が醸成される根幹をなすもので、逆にこの両側から詩を眺め冒頭の目標に何らかの緒を提供せんと企図する訳である。

I

ギリシヤの都市国家の人々はそれに先立つミノス・ミケーネ文明の荒廃した都市にその文明的遺産の恩恵を意識しながら自らの手をもって国家を形成して行った。そして彼等は国家毎に生活の理想像として人力崇拝の偶像である女神（あるいは男神）を外側に設定した。ギリシヤ文明の崩壊の原因が過度の人力崇拝に源を取ると考えられる場合にも、これだけがこの時代にあっては生きる信条として彼等の生活の中核をなしていたと見做されるので、斯様な崇拝対称の外側への展開が美の領域をも支配し、ギリシヤ芸術が何処か外側の様な場所に美の偶像を想定して、その高処に向かわんとする動勢が強烈を極めたのも至極当然の成行であろう。

相つぐキリスト教の支配する時代にあっても、その教義の指定する一定不変の尺度で美を外側に置き、それによって生きる保証を得るという傾向には変りがなかった。

以上の様な時代には、内側は固定され完全無欠なものと既定されているので、自由

に主体が意識の翼を展げる事は忌避され、内側の定域を脱する事は生死にかかわる危険をはらむものと歴史は告げている。生の保証はこれ程までにきびしく推移するのであり、両側の矛盾相剋が人間精神の悲壮な進化を迎えるのも崇高という言葉にまつ外はない。

やがて、中世の暗黒に黎明をもたらしたルネッサンスはこの様な方式的級位をもって外側に美を傍観する仕方に満足出来ず、美の規定を内側に追求し時代の思潮に沿わんとする形勢を生むに至った。人間開放の波は創造物中の最高位を人間に与えたのである。ロマンチズムは人間の内側に於ける意識の燃焼に機動的役割を果す靈性とか創造力の指向するままに感情を放恣した。靈性の活動舞台は主体と客体の間にあり、創造力は両者に掛けられた橋上の先達となるのである。

もともと、外界の事物は form と matter の両要素を有するが、これが意識される場合には一体となって合致する事による。個々の事物が互に美しい form を取るとなると意識も高度なものとなり、観念の統一下に帰せしめられる。従って、中世に見られた形の順列は崩壊し、創造力に導かれるまま自由に人間の観念下に統率され、多様性をおびてくるのである。ロマンティック詩人は更に一步を進め、人間精神機能の全力を挙げて一層高度な放恣の果に統合状態をつくり出し、その結像が外界にそのままの姿を取らぬとしても取れる可能性をもつ体制を美の規準として、外側言いかえれば自然界に没入せんとしたのである。けれども、多彩にして個性に豊んだ内面的経験も究極においては、外側に集約することになり、この最終の場が信頼され人間との関係に於て破綻を来さぬ限りは、精神的權威の空白をみたし得るかに見えた。だが周囲の外的世界は中世の暗黒を通して培って来た知性の所産であり、もともと人間の手により形成されただけに、外側に対する疑惑の対称は人間自身に向けられなければならなかった。詩は外側の矛盾・過重・阻塞を内側に於て処理せんとする深刻なあがきを経て、次第に内への傾斜を高めて行くのである。結局、ロマンティズムの桜花の如き宿命はいかなる内側の熱度をもってしても人間の信頼を勝ち得られなかったことに起因する様に考えられる。

懷疑にとりつかれたビクトリア朝人は焦燥・自棄・絶望の果に止むなく過去の失われた權威に安息を見出そうとするのである。彼等の中にあつて新たな權威を内側に樹立せんと志し、偉大な足跡を現代にとどめ得た者の一人、イエイツを以下の項で追求して見ようと思う。

II

イエイツは上述の内・外両側関係をラファエル前派より継承し、アイルランドの背景の中にあって古代の神話や民話を最大の糧となしながら内的權威の確立を目指したのである。だが初期の詩に於ては英国の圧制下にあえぐアイルランドという地域的枠を除外するまでに至らず、上述の普遍的な動勢がそのままうけつがれていない様に思われる。もっともアイルランドの国情に見られた社会的抑圧には万人共通の同情が喚起され、それから世界的外側不信に転移するという偶然的共鳴が感ぜられなくもない。けれどもケルト伝説とか神話の如き伝統的国民文化は社会の後進性の解消と共に根本からその背景を失う恐れがある。すでにそうってしまった今日ではイエイツ初期の詩は叙事詩の性格をも併せもつ抒情詩となってしまうのである。そこではイエイツは詩に象徴を採用している。象徴主義は人間の無限の能力や、個性の絶対性を信奉するロマンチズムの立場にあって神秘主義の濃厚なものである。17世紀の象徴主義は、科学の存在にも拘らず、今日の如く現実には作用するまでに到達せず、当時の人々は科学自体をも神秘や夢想と混同していた様に考えられる。従って、外的世界に無限の可能性を認める事も出来たのである。現代では、外側は閉塞され、象徴主義は内側に向って神秘の花を咲かさねばならなかった。科学は詩人を内側に限定してしまうのである。今日の象徴主義は以前の無条件・無反省なものではなく分析的・科学的反省を経たものとなり、暗示は直観的・統一的な性質を附与されなければならない。

かかる象徴下にあっては、詩人を除外した象徴詩自身の世界が現出するに至り、現実の生はそれから隔絶される。上述の内・外両側の関係に当はめれば、内側に於ける奔放な象徴的想像力は外側とは全く対蹠的な世界をつくり出し、血の気のない冷感を伴うのである。詩人は poem 中に於てのみ poetry を可能ならしめるが故に、その身は外側にありながら詩の中では自らを隔絶している。つまり象徴詩的秩序が完璧であり純化せられるにつれて、詩人はますます外側との関係を絶つ事になり、自己閉鎖的傾きを強めて行くのである。遂には詩人の idea の中にある透明な美質は生とは無関係な棲息に適しない外側の幻と化するのである。象徴的手法に於ける外側への反動は生を営む限り詩人の嫌悪する外的世界に回帰せざるを得ない悲壮な限界を劃してしまう。

結局イエイツは劇運動等を通しての社会生活から来る影響や象徴論そのものの性情、魔術に対する興味等のために、アイルランドの神話・民話の世界から新たな象徴の体

系を求めて行くのである。この象徴の住居は飽くまで科学の洗礼をうけたもので、伝統的宗教や科学を超脱するものでなければならなかった。

III

1899年以来イエイツは演劇運動に手を染め始めている。彼独自の象徴的世界は一見瓦解の方向を辿ったかに見えた。主力は演劇にそそがれていた。1903年出版の詩集 *In the Seven Woods* と *The Green Helmet and other Poems* (1910) との年間の開きがそれを物語っている。その間の外部世界の体験は自己の詩の中心を失った過渡的な漂いを経て、*The Green Helmet and other Poems* の中に漸く歴然と萌芽してくるのである。以下の詩はその一篇からの引用である。

Though leaves are many, the root is one;

Through all the lying days of my youth

I swayed my leaves and flowers in the sun;

Now I may wither into the truth. (The Coming of Wisdom with Time)

強大な外的世界と内側を拮抗させ、均衡を保つのに必須な象徴即ちアイルランドという妖精や幽霊の存在する荒涼たる現代の歩みから忘却された国土、魔術の自在な変幻性とこれらの背景から溶融された特異な世界も現実の支援があって初めて詩がなり立つ。現世が激動し、急速な進展を予想させる場合言い換えれば、共通のコスモポリタンな暗雲がアイルランドをおおい始めそしてイエイツがそれを自覚した時、詩は根底からゆり動かされる。

The Wild Swans at Coole (1917) 中では内・外側のバランスを失い、現実に屈服された詩人の苦々しい気骨を髣髴させている。第一次世界大戦期の1916年の *Easter Rebellion*, 1919年以後の内乱も常人には非情に映る程、イエイツは観照的態度をくづしてはいない。常人の人間性は高熱し、現実にそれを具現する方向を進むすぐれた道が開かれているが、彼は冷温にとどまりそして、燃焼するのである。眼前の出来事を包含する量り知れぬ広大な心——これこそイエイツの詩の *immortality* を可能ならしめる資質であろう。同詩集中の “The Fisherman” それから *Michael Robartes and the Dancer* (1921) の “A Prayer for my Daughter” 等は苛烈な現実の中にあって、人間味を失わぬ逞しい人格を窺わせている。生々しい対象物に向かう場合の彼の態度には、それが霊的なもの現実的なものの如何を問わず、対称を超えた彼方に広大な抱擁力を有しているのを感じる。彼の確執は文字通りのものと受け取れ

ぬ要素があり、可成りの余地を絶えず背後に残している。これはまた我々に彼の詩の進展を予想させる因由ともなっている。同時に外側との新たな拮抗へと発展し、詩の瓦壊を防ぐのではなかろうか。心象が事実を表示するのみでは余りにも不足な現代にあっては、止むを得ぬ詩的態度であろう。

IV

イエイツの初期に関心を寄せたケルト的抒情の世界から現実の自己の立つ社会に眼を向けたことは上来の内・外両側から思考すれば、外側と内側が接触・対置したことを意味するものではない。以前には内側の一部が内側の枠内にあって現実を超越した高次の生をかたちづくっていた。いわば外的世界は全く埒外に置かれていたのである。ロマンティズムの時代にあつては、この内側の一部は idea として多彩な個性的性格を誇り、外側と緊密な関係を保持していた。イエイツはこの内側の一部を“Mask”とか“Anti-Self”と称して「自己のありたいと希求する内面を表現するもの」と考えたのである。Stephen Spender は自著 *The Creative Element* の“Hammered Gold and Gold Enamelling of Humanity”の章で次の様に述べている。

The idea of “The mask” which plays so much part in his work—and one can truly also say in his life—is of external gesture, form, or pose in which the projected interior self meets and indeed fuses with the outside world.

これは最も公式的な解釈ですべてこの中に含まれると思うが、上来の私の進めて来た仕方では追求して見ると、人が内側で感じ考えたところの実質を外側に放出する場合、全く同じものを内から外へ表明出来るものではなく外界の状況に応じて多少とも異つたものとなる。即ち先ず内側では形のない実質であるがそれが外側に出ると形を取らねばならない。内側にあるものが外側によって影響を受ける時には根底的で可成り恒久性がある。内側では同一の実質であってもそれが外側に表出される段になると微妙に変化する放出形となり流動的である。イエイツの場合を例にとれば、

When one looks into ideas like “mask”, “anti-self”, and “opposite” in Yeats, more and more they seem slogans in a struggle he was undertaking with his time. A struggle to break through the incense and mists of the Aesthetic Movement and the Celtic Twilight, to avoid the subjective extremes of the Symbolists, to refuse the proud temptations of an

exalted, scholarly intellectualism, to be drawn into and yet withdraw from the activities of the Irish nationalists and to attack the scientific views of Tyndal and Huxley. (Hammered Gold and Gold Enamelling of Humanity)

という様な訳で彼の歩んで来たすべての芸術活動の転移を“Mask”なる言葉でこの上なく簡略することが出来、完全に納得させてくれる。Stephen Spender がイエイツに関して特に注意を促しているのは“Mask”が決して主観の世界に限定されたり単に内側の心理的な面のみにとどまるのではなくて、外側に対する反動的戦闘的な意味をもち modernity を十分身につけた人物のそれであるということである。

“Mask”という言葉を多角的な社会活動を経験したイエイツが殊更にこの 20 世紀に持ち来り、それを社会的武器として兎も角も unity of being を得ようとする意図に少からぬ共感を覚える。けれども、これは内・外両側の不一致はそれとして達観する生命のあり方を指すのである。そしてその背景には外界を体系化出来るという前提が無ければならない。

イエイツは彼の奇書“A Vision”の中で文明の全過程を 23 個の月の諸相に分け独自の回帰説を展開する。そしてそれぞれの歴史上の時代はその範疇に従うものと考えるのである。彼が人生を達観視する根拠もこの体系化に存し、我々はそれをそのまま納得し兼ねるが現代の哲学が欠いている特性即ち体系的で包括的な要素をそなえているという点で注目すべきであろう。“A Vision”はこの体系は外側からやって来た幻覚をもとにしたものであり、他の人々も同じ経験をもったと述べている。従ってイエイツ個人の捏造になる妄想ではない。しかもこの様な客観性を持つということが現代社会の経験では与えられない精神的空白を満たしてくれるのに役立つのである。そこには原始の科学や宗教に見られる生動を可能ならしめる神秘的統一を目指していると同時に合理主義的近代人の懐疑を経た痕跡があり、信ずるか信じないかは別の問題で充満する生のみが必要とするぎりぎりのものであろう。イエイツは、初期に於て、アイルランド民話から象徴を得たと同じ仕方でも“A Vision”から象徴を受けたにすぎないと言っている。彼の妻も同書の中で“...we have come to give you metaphores for poetry”と説明していること等は等しく上述を裏書きしているものである。

要約すると、イエイツのなしたことは以上の様な思索を経ても結局外側を内側に抱擁したことだけであって、外側は内側を顕わす契機にとどまるのである。

V

後期のイエイツは従来の内的權威の確認にとどまることだけに満足出来なくなっていた。彼の絶えざる厳しい自己批判は自ら打ちたてた体系の枠を拡大する内的要求に駆られているのである。彼は体系を希求すると同時にそれが生動を固執するものでないという理由から、生動に執着しながら生動が体系でないが故に内側の相克は激烈を極めていた。この傾向は次第にあらわになり、内的矛盾の解決をこころざすのである。

イエイツは内的矛盾の処理に当り、前時代的な詠歎に終止することなく、生を肯定する側に立ちしかも体系をも附加しようとする積極的態度をもって臨むのである。また現代に於て、受動的な苦しみとして感得する多くの詩を見受けるが、これはイエイツの最も忌憚したところであった。

イエイツは人生を悲劇と考えている。自己にしのび寄る老化を実感しつつ、イエイツは外側世界に沈湎する。詩集 *The Tower* の諸々の詩には、現世を歌ったものが多い。その現世はほとんど常に頹廢した辛竦なものとなってあらわされている。

Death and life were not
Till man made up the whole,
made lock, stock and barrel
Out of his bitter soul,
Aye, sun and moon and star, all,

これは“*The Tower*”からの行であるが人間の手でつくり出された現世に行われている諸通則を痛烈に指摘している。その根底には詩人自身が外側世界の通則の中に生息していることを物語る響がある。そして同詩集中の“*Sailing to Byzantium*”ではこの様な現世から、この世の象徴“gyre”の力を借りて永遠の実体に逃れ出んとする。しかも猶、時間の束縛を離れ永遠の光輝ある芸術品になりたいと希う。名工の手になる芸術作品はこの世の中から創造された実存する物体であり、人間の到達し得る最高の業績である。これはまた己れをこの様な芸術に凝集せしめる偉大なる詩人の詩に匹敵する。これ等の存在は無窮であり、世の有為転変を超脱した世界に住まうもの——イエイツは“*Anima Mundi*”に属するものと言っている——である。実存しながらも人間の宿命を離脱する“opposite”である。そして

Once out of nature I shall never take
My bodily form from any natural thing,

But such a form as Grecion goldsmiths make
Of hammered gold and gold enamelling
To keep a drowsy Emperor awake;

とうたう。これ程までに現世を厭むイエイツ、この世の片鱗すらもとどめておきたがらぬ赤裸な願い——外側に降り立ち、そこだけを拠点として生を営むものの悲痛な叫びが聴かれる。これはまた今の外的世界を終焉せしめ、人々の希求して止まない真の社会即ち何の黒雲も漂わぬ和やかな光明に汪溢した世間を打ち立てようという心情を秘めたものとも考えられる。

以上、例示した詩はこの詩集中の一粒に過ぎない。詩集 *The Tower* には外側を批判の対称にせぬ詩はない。様々な image, symbol がすべて現実という焦点に向かって活発な展開を担っている。

これ等の詩にあらわれた *unity of being* は外側を拠り処として内側の高度な人間存在に向かう完全なる生動を固執して止まぬイエイツの詩的経験と言い得る。内・外の指向が逆になったという点で前期のイエイツとは相当な隔りを感じさせる。重心が明らかに外側にかかって来ている。だが外側世界に内的要素が余りにも強烈に表明されており、内側の矛盾を外側の場に吐露しているという風な印象が受け取れる。つまり、外側の場に席を占める内側の詩だと言えないだろうか。

詩集 *The Winding Stair and Other Poems* は元老議員の地位にあって演説に視察に明け暮れ、一層現実経験を深めた頃のイエイツの作である。その中で天性の鋭い感受性は眼前の万象の放射をイエイツ本来の想像ともいふべき関門を通して受けて立つ。単なる写真がそれを読む現代人を戦慄させずにはおかぬ強烈な閃きを感じしめるのである。そして禅の影響を経て元重の手になれる日本の古刀の時代に思いを馳せ、乱世の時代に万古不易の名刀の淵源をさぐる。時の流れ世の変転を知らぬすぐれた芸術品が現代を彷彿させる激動の時代に生じたと見做す。ここでイエイツは現実完全に定着しているのを見ることが出来る。死も人間がつくったものだと言え、神への憎しみこそが神に至る唯一の道であると考え。対蹠的な両要素をもったこれ等の“Mask”が現実面上で統一をもつ。ここに至って如何なる激動も宿命をも恐れぬ生ある芸術品になることが出来たと言えよう。内・外両側の枠は消失し、人間の生命のすべての相が流動し且渾然と一体化している。晩年のイエイツは実存だけが信奉出来るただ一つの拠点であると言えよう。これはまた、現実より外にのがれる処を知らないわれわれに連なる現代共通の特性と考えられるのである。